

近世墓にみる階層性

—筑前秋月藩城下の寺院墓地を対象として—

時津 裕子（徳山大学）

はじめに

九州地方では、近世墓の調査数自体が少なく、資料としてまとめたものが見られない時期が長く続いた（井上 1978；小田 1990）。90 年中頃以降、女狐近世墓地（田中 1996）など詳細で良質な調査報告が増加するが、やはりほとんどは開発・改葬に伴う緊急調査で、特定の集落や一族の墓域を対象とする単発的なものであった。このため、近世墓研究から当該期の階層化社会を総体的に論じるのは困難なままであった。

こうした中で、筆者は筑前秋月藩城下の寺院墓地において継続的に調査を実施してきた。秋月藩は福岡藩の支藩にあたり、5 万石の小藩ながら、政治的・経済的には当初から高い独立性を保ってきた。家臣団は、藩が定める家格・役職・禄高等によって厳格に階層化されており、儀礼の際のふるまいや城下の空間構造などにもその構造ははっきりと表れていた（柴多、1980；時津、2000）。筆者が目指したのは、この階層化社会の全体を視野に入れた状態で、近世墓標から階層構造を抽出し、解釈することであった。

1. 調査方法

城下内で近接する、寺格・宗派の異なる 4 寺院（古心寺：臨済宗、長生寺：曹洞宗、大涼寺：浄土宗、淨覺寺：浄土真宗）が保有する墓地内の約 700 基について、墓石の実測、写真撮影、刻印内容や装飾に関する記録を行った。現在まで祭祀が継続されている墓がほとんどであるため、下部構造に関するデータは得ていない。また一族ごとのまとまりが明確な墓域については、簡易測量を行い、各墓石の空間配置も記録した。

2. 分析

(1) 型式学的検討と編年

作成した実測図の形態特徴・法量を用いて、属性分析・多変量解析を実施し、11 の墓石形式と 21 型式を設定する型式学的分類および編年を行った。また墓石形式別にまとめたセリエーショングラフを作成し、年代が下ると主流となる墓石形式が板碑型、櫛形、角柱型へと交替する一方で、時代を問わず、自然石という代替選択肢があることが明らかになった。また、高階層者のものとされる笠付型、僧侶の無法塔型、児童に用いられる光背形も、長期にわたって一定の割合で存在することがたしかめられた。

(2) 墓域ごとの比較

明確なまとまりを形成する 9 つの墓域（黒田家 L、黒田家 C、宮崎家 G、宮崎家 E、林家、木付家、磯家、遠山家、加峯家）を取り上げ、形式の使用頻度、サイズ（墓石の塔身高）、刻印・記載内容等の比較を行い、これらのデータを総合することで各墓域の階層を推定した。

(3) 文献史料との対照

墓石に記載された被葬者の俗名を、幕末から明治期にかけて編さんされた藩内の役職担当者一覧（『秋月藩累代役人名列』、『秋月諸士以下共名付』）や家臣一族の出自と系譜（『秋月諸士系譜』）、分限帳（『秋月諸士分限』、『秋月役々分限』）に記された氏名と照合し、被葬者の家格・役職・禄高（石高）数、武芸や学問社会貢献など個人の功績についての情報を得た。また一部被葬者については、城下の古地図と照合することで居宅（敷地）の位置と大きさが判明した。

3. 考察

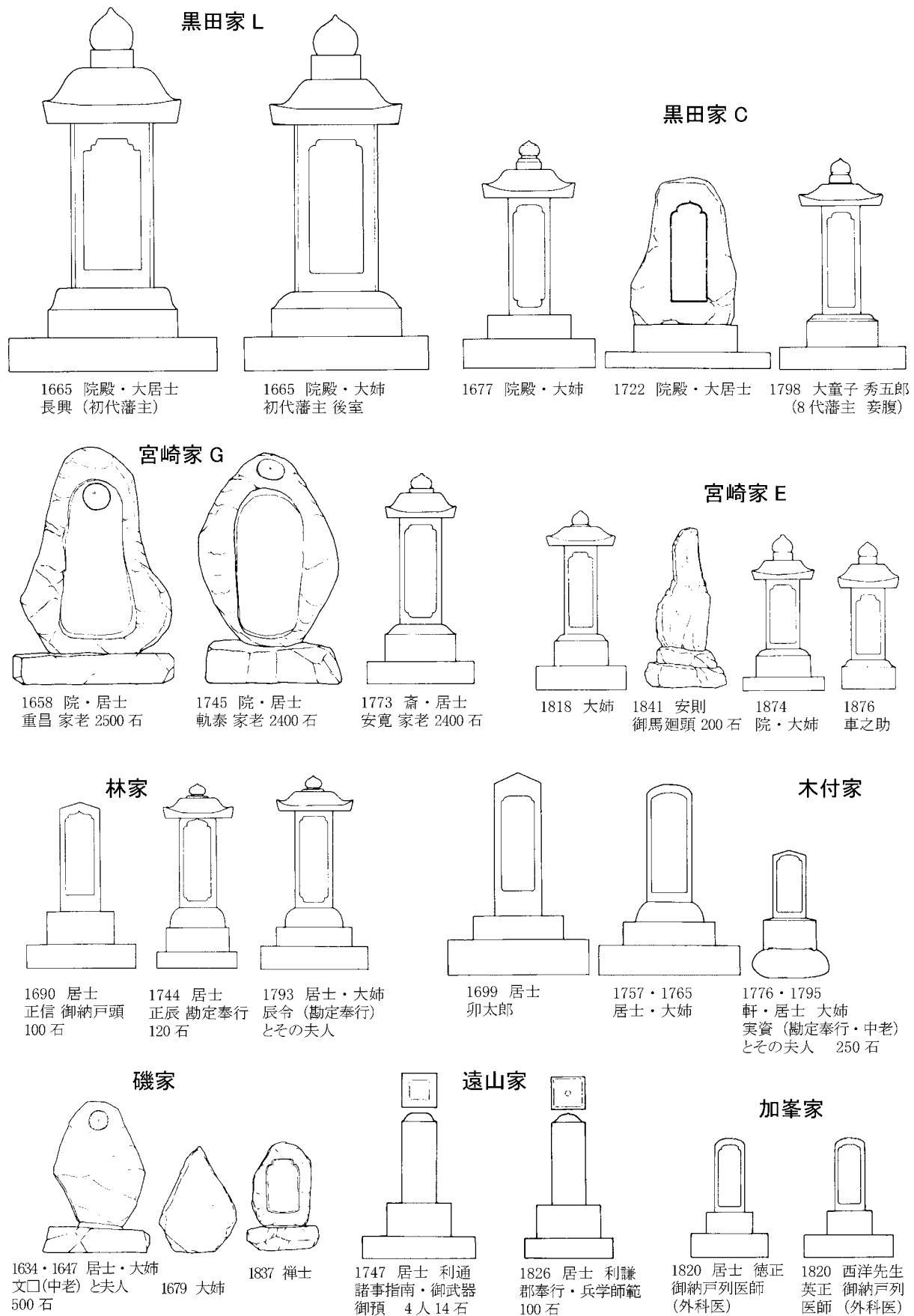
墓石の形態（形式）、サイズ、戒名等の考古学的分析によってもたらされた階層の推定結果は、文献史料から明らかになる被葬者情報と概ね一致していた。墓石サイズの格差は数千石を受け取る重臣から100石～数人扶持の禄が支給される下級武士間で明らかであり、そのことはまた、上級武士の指標とされる笠付型墓石の選択率や、戒名の格（院（殿）号の有無、位号の種類等）や個人の功績など記載事項においても同様であったといえる。ただし、これらの要素を複合させて階層推定する場合、やや複雑な様相を呈することになる。形態×サイズの組み合わせで見たとき、たとえば藩主の子女（黒田家C）と家老職を輩出した重臣一族（宮崎家G）を比較すると、使用形式（笠付型の頻度）で勝るのは前者であるが、サイズで勝るのは圧倒的に後者となる。形と大きさとどちらの要素を優先させて判断すればよいのであろうか。この問題は、都出（1989）が古墳を例として言及したように、考古学的推定の難しさや限界を示すものであるといえるだろう。しかし同時に、その上下関係が判然としないところが、高度に階層化された複雑な社会においては、有効に機能している側面もあるのではないだろうか。一族の政治力や経済力を誇示することには利点だけでなく、他の一族との競合や対立を深めるリスクがある。そして緊張関係に陥る相手が、制度や社会通年によって自分より高位の階層と位置づけられている場合、リスクは最も大きくなるだろう。宮崎家が藩主の子女一族を凌駕するサイズの墓を建てる際に笠付型墓石を決して用いないことも、社会戦略の一環として解釈できるかもしれない。

【文献】

- 井上裕弘編 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』, 9 福岡：福岡県教育委員会。
 小田和利寛編 1990 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』, 16. 福岡：福岡県教育委員会。
 柴多一雄 1980 秋月の歴史 後藤元一・工藤卓・宮本雅明・齊藤恭助・阿部雄一郎編『秋月』甘木市教育委員会
 田中裕介 1996 女狐近世墓地一大分市高崎所在女狐集落近世共同墓地の調査—. 『九州横断自動車道関係調査報告書』, 5. pp.39-271.
 都出比呂志 1989 古墳時代の中央と地方 『古代史復元』, 6 講談社
 時津裕子 1998 近世以降の墳墓の型式学的研究—筑前秋月城下を中心として—. 『人類史研究』, 10 : 74-96.
 時津裕子 2000 近世墓にみる階層性—筑前秋月城下の事例から—『日本考古学』, 9 : 97-122
 西川希水 『秋月藩累代役人名列』, 『秋月諸氏分限』, 『秋月諸氏以下共名付』
 森三太夫 『秋月役々分限』

第1表 各墓域の総合情報

墓域名	所在寺院	存続期間	家格等	役職等	石高／扶持高	墓石形態	サイズ	戒名
黒田家L	古心寺	1635～1892年	藩主一族	歴代藩主と正室	—	特大笠付型中心。 五輪塔、宝夾印塔	250cm程度(笠) 110cm程度(五)	院殿号／大姫
黒田家C	古心寺	1677～1888年	藩主一族	藩主の子女と側室	—	笠付型、自然石	90～150cm	院殿号・大姫、 大童子／大童女
宮崎家G	長生寺	1625～1773年	馬廻(小書院)	家老を輩出。	2200～2500石	自然石、笠付型	160～200cm 80～130cm	院・居士／大姫 中心
宮崎家E	長生寺	1796～1901年	馬廻(小書院)	馬廻頭、馬廻頭、中老	200石	自然石、笠付型	50～110cm	院・居士／大姫 中心
林家	長生寺	1690～1849年	馬廻(小書院) ～大書院)	鉄砲頭、御側筒頭、勘定奉行、 御納戸頭	100～120石	自然石、櫛形、板 碑形。笠付型若干	60～110cm	居士／大姫 信士／信女
木付家	長生寺	1699～1918年	馬廻(大書院)	鉄砲頭、馬廻頭、中老	250石	板碑形、自然石、 櫛形	50cm台が最頻 80～120cmも	居士／大姫 信士／信女
磯家	長生寺	1671～1932年	馬廻(大書院)	勘定奉行、郡奉行、目付頭、御 用役等。	100石	自然石、櫛形	50～100cm	居士／大姫 信士／信女
遠山家	長生寺	1734～1908年	無足～馬廻 (大書院)	勘定奉行、郡奉行等、御武器 御預等。藩校兵学教官を歴任。	90～110石	尖頭・台頭角柱が 大半、自然石若干	50～80cm 60cm台が最頻	居士／大姫 中心
加峯家	長生寺	1802～1884	無足列～御納 戸列	西洋外科医	110人扶持	櫛形	60cm台	居士／大姫 中心



第1図 各墓域の実測図 (S=1/50)